

## フィリップ・ジトウィッツ先生

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2012-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森本, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12504">http://hdl.handle.net/10291/12504</a>

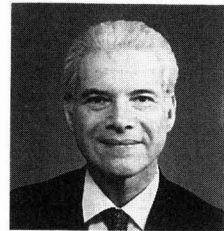
## フィリップ・ジトウィッツ先生

ジトウィッツ先生にはおどろかされてばかりいるような気がする。

初めてお会いしたのは、確か数年前、山中セミナーハウスで行われた、EPCの学生を中心とする英語の合宿の際であったと思う。ケビン・マーク先生を中心に、有志の学生たちが少人数集まった中に、当時明治では他学部の非常勤講師であった先生がいらしていた。最初の印象は、なんと自然に学生たちに溶け込んでいるのか、というもので、てっきり他のクラスで彼らを既に長い間教えられていらつしやるのかと思ったり、たった数日前に初めて会った学生たちの絶大な信頼を得ておられる。また、非常勤講師でありながら、手弁当で、このような合宿に参加してくださる、しかも元プロードウエイのミュージカルのプロデューサー

ということ。その謙虚さと熱心さにさらに感動し、驚かされた。

次にご一緒したのは、やはり山中セミナーハウスでの随意選択外国語科目の夏期英会話集中講座であった。今度は、午前と午後のクラスを一緒に担当するパートナーとして教育に携わることになった。その時には、先生が演劇の専門家で、特にボディーラングエジの英語教育においての扱いなどをご研究なさっている等の予備知識もあったし、その教授法への応用についても、ある程度は想像していたのだが、それでも一緒にクラスを担当してショックを受けた。並外れた集中力と学生を尊重する姿勢、そしてボディーラングエジの有効な使い方に、である。まさに、役者が舞台上立つときのような集中力と、すばらしい身振りを使って



学生に話しかけ、彼らの気をそらさない。常に学生たちの状態、彼らの要望などに気を配るだけでなく、ちゃんとそれを彼らに直接確認することを怠らない。また、一人々々の長所を認め、それを伝えることも非常にお上手である。(この辺は、多くのスタッフをまとめてリードしていくミュージカル・プロデューサーとしての経験の賜物なのであろう。)また、大変自然に学生たちにボディラングエジになじませることに長けていらして、どんな恥ずかしがり屋の学生でも、楽しそうにジェスチャーを交えて英語を話すようになっていく様をみて、本当に目を覚まされた気がした。これなら学生も彼を受け入れ、信頼するわけである。また、その基盤がしっかりしているから、余計学習に集中することも、そしてそれを楽しむことも可能になるわけである。私自身、そのへんの重要性は重々わかってはいたつもりだし、かなり実践しているつもりだったが、先生と同じ教室を分かち合ったことで、私の取り組み方がどんなに甘かったか思い知らされた。そのお陰で、その後私のティーチングスタイルも、少なからず影響を受け、それが学生たちへかなり還元されていると確信しているし、教育に携わる上での大きなエネ

ルギーをいただいた気がして、心から感謝している。後日、先生の御論文をいくつか拝読する機会を得たが、これほど自分の理論を実践に移している英語教育専門家も少ないと言つていいだろう。

外にも驚かされたことは多々ある。例えば、ジャパントイムスのお仕事で、様々な有名人をインタビューし、記事にしておられる。(華麗且つインパクトのある文体でお書きになることも付け加えておきたい。)最近では、北野武氏(明大出身)をインタビューし、お母様の若いときの恋人が明大出身だったことで、ご子息たちも明大に進むことを望まれた、などの秘話も引き出されたそう。その他、英語の俳句コンテストの審査などもこなしながら、非常に活発に研究論文も発表しておられ、その結果、キーボードの打ちすぎで、親指が慢性的の腱鞘炎になってしまっているほどである。朝四時に起きて原稿を書き、授業を複数のキャンパスで何コマもこなし、会議に出た後取材に出かける、というようなことはざらのようにである。その上、日本語の勉強で語学学校にも通い、こまめに学生や人の世話をする。聞いているだけでこっちのほうに疲れしてしまうようなハードスケジュールを、並外れた集中

力と体力でこなされるのである。

このような先生のご活躍の原動力は何なのだろう、とふと考えると、やはり、学生や、周りの人々、特に日本文化と英語文化の掛け橋になるために役に立ちたい、という先生の強い熱意と、もともと愛情豊かな先生のお人柄しかないだろうと思う。合宿授業と一緒に担当していても、一人一人の学生のこれからの人生まで視野に入れて大切に接されていることがひしひしと伝わってきた。

私生活では、写真とダイビングが趣味で、写真は教えられるほどの腕前。私も、ちよつとしたこつを覚えていただいたおかげで、かなり上達した気がする。新婚の奥様とは日本語のみで(!!)コミュニケーションを取っておられるとのこと。また、ヨガや瞑想など、東洋思想にも造詣が深いようだし、同僚のピーターセン先生と、映画、小説、ワインの話をできるくらいに深く広い知識の持ち主でもある。そして、この原稿を書いている間(八月)にも、キャンセル待ちのチケットが今日取れた、ということ、お気に入りのタイへ、突然一人で出かけて行った、と奥様から伺ったところである。また、この間は、会議の真最中に、突

然、「何か食べるもの持っていない? このままだと空腹で倒れそう。」とおっしゃられる。あの巨体とあれだけの活動量を維持するには、相当なカロリーを必要とするのだろう。(でも、菜食主義者である!)

多分、奥様に伺えば、まだまだびっくりするような話はいくらでも出てきそうであるが、それはこれからの楽しみにとっておこう。後、少し気がかりなのは、先生の御健康である。とにかく、日本語でうまく「ノ」—と言う言い方を周りが教えてあげないと、倒れないかとこちらが心配してしまうほどの献身ぶりである。これからは、先生の寛容さややさしさに甘えすぎないようにして、同僚として、また一友人としてお付き合ひしなければ、とこの原稿を書きながら、改めて反省した次第である。

森本 陽子